大[illegible]

枇杷之葉か[illegible]

[illegible]

百花

百花鳥
巻之四

卯の花や賭出てもうり郭公　呉丈

七十三

卯花（うのはな）

花ごふん付立ちべにすこしの具にて付立葉
緑青に墨の汁まぜてくま取也

杜鵑（ほとゝぎす）

杜宇　子規　子嶲　蜀魄
鶗鴂　鷤鴂　鷤搗　買鏡
時鳥　霍公　別都頓宜壽

背墨に胡粉まぜて地色ぬり背中うす墨にてくま
濃墨にて斑を付ごふんにてくまごふん地
うす墨にて斑を入ごふんにてくま風切尾
ともに墨にて描口のうちはひわつぶし

七十四

雞冠（けいとう）

鶏頭花

花赤い肉色上朱にて隈とりしてつくり
葉はごふんくまごふんにてつくり黄土
ちやうけ葉えより緑青にて先よりぼかし
ごふんへだて糸墨白あくめり先
のけくまりとしてきらくまどるべし

鴫（しぎ）

背うす墨頭よりまで色の合まぜにつけ
羽より背中墨にて風切尾墨にふち
ごふんにて白く胡粉にくまどり
胴とくだんつき下腹ごふんにくま同色也

七しかくちやりましこや新れむ

一九

連翹よ口説ハ落も野花の光

女羅架
琴松

七十五

連翹（れんげう）

花しわうの具付ゑ茎葉まの汁付てそ
隠れてよし

瑠璃（るり） 翠雀

觜墨くろ墨にて頭より背中こんぜうにてくま
より風切尾墨にて付ゑひの浅墨そね
目毛も下段ごふんく腹目毛もとるべし

七十六

風蘭（ふうらん）

花ごふん付ゑ志べ合黄土葉緑青付ゑ
根葉ろくせう付ゑ白緑付ゑ茎のけ
ゑんの入べし

啄木鳥（きつつき） 鴷

觜墨ゑ腹をしをかつくまでに赤く朱
の上淡墨の目玉頭にた合黄土朱すゝ
もくさ背中淡墨にて腹さ付うすずみ
くまごふんくさ入目くもくさとるべし

啄木や着れ捨らうや国書請

伴輅

畫工精妙沙羅樹 碧鳥如生豈不翔
欲問涅槃真實相 堪憐喋背絶鳴嗷

玉宗千来

七十七

沙羅雙樹

花ごふんくまごふん緑こしべごふんうて
葉は志ほうらくあをうて白緑わりの葉の
けゞくりあをゞく候葉緑青葉のけゞり
く候緑青

碧鳥

嘴足くろ墨く候頭白しごふんくま脊中
腹はくろ墨くまよらみ毛うき緑青く合
黄土うくべし

七十八

牽牛花　朝良

花は地あさぎ法わりゑんぎく候上はごふん
ぜうけ中より四方へごふんくま葉緑青
葉のけ佳黄土まじへてうき記し

忍ぶの

嘴足くろ墨かしら腹白しごふんくま候目の毛
かさ脊中黒くま風切尾たんぽ墨佐す
なり二重ねうち墨上に合黄土うけごふん
く候ごふんとも出とべし

日よしろきもやゑなりの招ひき

千雀

ほりしろハ百合小深山の屏風かな

少年　金助

七十九

百合（ゆり）　薔瞿

赤白あり赤ハ花ハ枇杷色朱にてくまどん
じつうきハ黒にてしべ墨にて白ぬき
付る白ハごふんにて墨にてくまごふん
にてしべ濃墨にて白ぬき入藍白緑
葉緑青茎の汁仕立

深山頬白（みやまかしろ）

常の黒に薄く背中まで上は朱
どりみの汁風物の黒仕立尾羽は根合黄土
うけごふんくまとり濃ごふん

八十

仙台萩（せんだいはぎ）

花合黄土葉緑青茎のけして仕立
枯木枝朱どりて本入とすべし

烏（からす）

常の黒羽の円いく墨隠濃墨にて
書立うすく墨にて一遍かくべし
下胎うすく墨にてくまとりすべし

みやまけも腹は河にて城下萩　莎鶏

喜し鳥々常し住春　岑水

嘴とかく〱わ〱きつ〱紫蘭かな

玄詞

八十一

芝蘭（しらん）

花色下の具わり上色下ばはてうりくまん
仕上べし葉二どん緑青うら人膠薄
汁し

鶤（とうま）

嘴足は墨く淡胴の内朱すく頭より惣体
うすく墨くまとる上に墨れけうすうけ合墨
支子にてあわひと茶くれの風切尾先墨
くまこ毛書とべし下段こふんくま内毛書
紛うら朱どみ府を入内毛書とべし

八十二

椿（つばき）

花色下の具色下ばらくま内つききいかげ
ぞのぶくく入べし花の結うりごふんくまく
うすくうくべし書べごふんうて蘂上書きう
とうくべしうて白緑葉墨れけくうり色ん
どくまどうべし葉緑青て葉の汁うる白
く淡紛書とべし

青鵐（やまどり）

嘴足色下の具色下ばうり頭より惣体
墨のけくま墨墨れけすて毛書風切尾墨
く淡うらごふんうてうわれくまでふん紛
書むの書て〱淡紛うら墨の汁くま内
毛うき下段ごふんくま内毛書とべし
胴の内朱どみうらごふんうふすく入べし

山吹や椿の花も元興寺

蓮東

母のなのあれ書かも春と告

小寺
菊麿

八十三

海棠（かいどう）

花は臙脂白し臙脂の具臙脂ずく度は
ごふんくまぢべごふんにてつゞく臙脂の具
臙脂く度ひくきよう色淡つよくゆるやかし
うそなをの汁葉二ぐん緑青草の汁
にて仕立べし

黄鳥（うぐひす）

嘴臙脂の具臙脂ぐくり足も墨の具也
拝志ぐうくまは毛を羽墨法ぬりてふち
おとようすきを墨にて一遍だき先より
ごふんくまは毛をとぐべし尾同じく仕立
べし

八十四

萩（はぎ）

白はあり花臙脂の具臙脂くまごふん
とくの色白いごふんく度まよう〇の色葉二
ぐん緑青草の汁にて仕立べし

鶉（うづら）

嘴墨の度合黄土にてくべし物ぐ拝も墨にて所
くく度くよ朱どるみくべし又く合黄
土のけごふんにて所々〇の色朱どる毛を
とぐべし

大名はつ川らいしいより借古嵐つ

蘭洲

かしどりや濱うり霞にゆかりの木

來九

八十五

さんしゆゆの木

花ゑのぐの具ゑのぐにて後は雌黄先にごふん くまは藍合黄土ゑのぐにてくまどる

鵲（かしどり）

鵲

嘴口の内墨にてごふん墨にて腐を実墨男 うす墨にて腹上に朱むらさきにて朱墨うて 毛立風切墨にてうちごふんくま黒きこえ ぜにて腐を作るべしごふん立てぬるべし

八十六

木槿（むくげ）

蕣英

花ゑのぐの具ゑのぐにて後白ごふんくまごふん 節立うてかわ白緑葉のけにて後葉ろくせう 葉のけりうにて後節立ぬるべし

きんぐろ

嘴白しごふん足同頭黒濃墨にて風切 墨付立拙絆うす墨にて腹上にゑのぐ くま同くを毛立ぬるべし

きんちやくやか咲添侍枝木槿垣

郁之

ととゝ田つくかりのよ花のりんこかな

齋貞

八十七

桃（もも）

花ぞめの具上に花ぞくほきべごふん少わひそへまぜ具すてそ本茶のけ葉ろくせう茶のけそゑにくまし

音呼（いんこ）

ば紺墨同の同朱わどみ取白緑く頭茶のけ毛のさむ〇より名のまで志まうくまきまうの具にて毛云風切羽墨のさ入全体白緑のくまれ仕立尾のきいよ毒さみのもより朱にまて仕立べし

八十八

鷹爪（きくいただき）

花さまの具差茶れ汁にて本花ぞくゑ〇ゑみ具錆なし

山雀（やまがら）

鶴

紺墨同墨ねらより全体にま墨くまよ上に朱わどみくる頰より後すて入合わせ土のくる風切尾尤墨仕立ふられごふん毛のさむごふんきふひへ地体毛のさ朱わどみく

唐韻て山雀短よまゑ白ら卵

擔山

八十九

栯（うハ）　文　槲　樸樕　大葉櫟

花葉緑青草の汁にて染め節ハ墨にて隈をとり枯れ色ハ合黄土に朱を少しさしてぬるべし

九十

木芙蓉（もくふよう）

花ハ白ニ色あり紅ハ臙脂の具を以て染め内節ハ代赭より薄く隈をとり、ごふんにて上より隈をとりつぼみハ白緑茎の汁にて染め葉緑青草乃汁にて節をとるべし

繡眼兒（めじろ）　目白

嘴と足墨にて目の回り朱ごふんにて隈をとり背中まで薄墨にて上より黄のけ少し引き黄の汁にて毛をとり腹ごふんにて染め上を薄く隈とる

鵯（ひよどり）

嘴足墨にて染め頭男墨にて隈をとり朱どみの汁にて毛を書き尾墨にて二度すり、ごふんにて目毛をかき腹白しごふんにて目毛をかく

雨ふゝむ今日引しめ木芙蓉

加齋

かゝりやゝ雪つゝみの羽覆䟽

奉石

九十一

苅萱（かるかや）

花せうゑんじ付之葉茎のけ付之小草
出入合いづれも薮ちうく仕立べし

白雲雀（しろひばり）

嘴足の具からうすり紫の緋すゞめ茶く成
よき羽けふけ風切黒くて二すじねずみご
ふんそのこ白き也後白しごふんくま
白毛うき朱どみすて腑をのる

九十二

梂（うき）

花ごふんくまはせんよしたゝへの旬ひと付かきた
ゑ白緑葉緑も葉乃汁まうく成留
ちよくべし

山鵲（さんじゃく）

嘴足ハ赤し頭也上朱く成ゑんじくゝつる
いろどり白し頬黒くまますとく毛のさき紅
ふんせう背中羽やひ黒く成上に朱じみ
うけ風切黒く仕立ふちごふんその〇色とゝら合
羽上朱どみにてくまく毛先ごふんうき入
尾羽ごんせうかさねてふんせんよ置わり紅ゑんじ
の具よまんけして出ようりあひろう毛出きなし

雨をさそ羽音もとゞろ林乃むし

沾緑

御覧あれ色ぬのことり洒落染乃色　千舎

九十三

本綿（きもめん）　古終　日本民間所作是也

ゐなさうろく地ちべ朱中に一ゑむさきちべき
ごふん汁色うてる白線紫線きかうる地
紅ち茶の汁よそてとべし

唯紅鳥（のこどう）

嘴足くうす墨ゆぶらより脊中までうると
すゝく地上ニ朱ぶみろけ目の上に一ゑ白き
わのごふんくまくあご赤く朱れくまあり
風切尾先墨仕立そうごふんく地ぼく
毛うき

九十四

藤（ふぢ）　蔓草　黄環

此ハ白二色あり花ハ地わさ紀めうきんずく地
上にくんせう　汁茎白線紫線茶の
汁仕立　ゐ葉合茎生ゑんずく地茶のけ
紅ち二ぶん線きゆくの方よりうくべし
蔓朱ぶみくうり茶に汁ち入るべし

燕（つばめ）　鳦

頭より脊中墨ニて地ぶりよう墨
まで一遍ぐく頬に朱をとゑ〇ゑべしそう
ごふんく地ぼ毛うき

燕は見えしより藤の房

蕙洲

あ川とやこうめ橋の胴にほまし

玉牙

九十五

笑靨櫻（ろくめさくら）

花ごろん付之葉茶のけ付之絵まろけ
いづれも茶ちまうろく往之へし

鶯子鳥（おうしょう）

楽属　青雀

此所宗兵衛沓中うすまる頭上にちやを
うるべし風物是にて尾などに毛出来どるみ
しの〇より段まで合薬うけ下段ごろんるま
何毛出来どるみ前を出入へし

九十六

蘭（らん）

花志かもの花の異名出来ちろうして葉二だん
ろくせうまれけろ風名出来とへし

駒鳥（こまどり）

此所宗兵衛より此様うすまるだと上に来出来
の尾をどうくべしもんのろくすなく往まし
しの〇合薬土下そうくごろんく風同も出さし

駒とりや風の指南車葉乃色

曼羨

九十七

風車（かざぐるま） 鉄線花

花わさびたゞりまんじくはこんぜうくぜんはい菊のおくにべにをそくはまんじくゝり葉ニだん緑青葉のけ仕立墨ニ朱すミ仕立なり

川烏鷄

かしら墨くは毛うすきうす墨背中胡粉あさぎの具墨毛書風切流墨にてふちごふんくは尾もはじ目のきくあごとりだごふんくまく

九十八

さうまをいばら

花まうの具豊緑青いづれも付立葉ろくせう葉はけ上ゑふとおん付立て

鶯ひす

嘴うす墨かしら背中うす墨くまくまの朱ずきうけ風切墨誥毛書墨ぐるめ

むしの囀来る百度将へり日や書也

柳琴

籬の花縒りやさはりかやくゝ

野乙

咲くこ婦きしはと木兎の昼闇し

嶺二

九十九

辛夷（こぶし） 杞棣

花ごふんに丹ごふん紅まぜて少墨のけ
葉緑青にまぜくま紫うすき墨のけにて
本うす墨にて上あゐくまどるべし

木兎（みゝづく） 鵂鶹 角鴟 老兎 遂魂梟

眼より脊け墨に雨上に朱まじり墨みのけ
ぢみ毛出雨より後合黄まぜのけ朱まぜて
毛さきごふんにて色毛出るべし

百

枇杷（びは）

花ごふんに雨にて少墨のけ葉緑青
葉のけ墨くまに紫出るべし
本うす墨にてまにあゐくまどるけ合黄へ
土乃きらひとるべし

鴞（ふくろう） 梟

合黄まぜのけから朱まじり墨くみ目のから
朱まぜみくまごふん毛さき緑青朱まぜて
にて出分ごふんにて色毛出るべしとく
ますくまとに墨のけるべし

ふくろふは空をはなれぬかな 枇杷法師

白雲